

2026年11月

No.95

農林水産省
北海道農政事務所
北見地域拠点

人との縁が切り拓く農業経営！
佐々木 桜太（ささき おうた）さん



佐々木桜太さん（上段中）、ご家族（奥様、お子様）副社長（上段右）と（株）佐々木農園のみなさん

肥沃な土壌と気候に恵まれた小清水町で新規就農し、現在はレタスを中心とした経営を展開している神奈川県出身の佐々木さん。研修先での出会いや地域とのつながりに支えられながら、独自で販路を開拓し、就農5年で経営規模と収益を着実に拡大しました。

今回は、佐々木さんの就農までの歩みや経営に対する考え方を伺いました。

経歴・就農のきっかけ

神奈川県川崎市で生まれ育った佐々木さんは、高校卒業後に東京農業大学北海道オホーツクキャンパスへ進学し、学生時代から「いつか農業を仕事にしたい」という思いを抱いていました。その思いは強く、実家に住んでいた頃から、自ら管理する小さな家庭菜園で野菜づくりを楽しんでいたというほど。

大学卒業後は一度地元の食品関連企業に就職しましたが、農業への思いを捨てることができず、就農を決意しました。その後、小清水町内の農業法人（株式会社渡辺ファーム）で3年間の研修を受け、2022年に独立就農。現在はレタスを主力品目として栽培するほか、春菊、かぼちゃ、パセリ、ハーブ類なども手掛けています。就農当初13haだった経営面積は現在17haまで拡大し、レタスの二期作にも取り組むなど、経営の安定化と収益向上を図っています。



渡邊さん（左）と佐々木さん（右）

師との出会い

佐々木さんが農業経営者として歩み出すことができた背景には、研修先の経営者である渡邊さんとの出会いがあります。大学時代のアルバイトをきっかけに渡邊さんと出会い、その後3年間にわたり農業の基礎から経営の考え方までを学びました。就農を決意した際、真っ先に相談したのも渡辺さんでした。

渡邊さんは技術指導にとどまらず、農地や農業機械の確保、資金調達に関する相談など、独立に必要な様々な面で佐々木さんを支え続け、特に就農前には、佐々木さんが就農するための農地を確保するなど、将来の独立を見据えた環境づくりにも尽力されました。こうした支えがあったからこそ、佐々木さんは安心して就農への準備を進めることができたと振り返ります。

「渡邊さんがスタートラインに立たせてくれました。農業を続けてこられたのは渡邊さんのおかげです」と強い感謝の気持ちを語る佐々木さん。

今でも「師匠」と呼ぶ渡邊さんとの出会いは、佐々木さんの農業人生の原点となっています。

佐々木農園の強み



佐々木農園の大きな強みの一つが、販売先との直接取引です。一般的な流通では、市場や仲卸業者を経由して商品が消費者へ届けられますが、佐々木農園では自ら販路を開拓し、本州の企業や取引先へ直接出荷しています。

こうした直接取引により、農協や市場を経由しない分、販売手数料や流通コストを抑えて利益を確保し、経営の安定化につなげています。

また、取引先の要望や市場動向を直接聞くことができるため、需要に応じた生産や販売戦略を立てやすいことも大きなメリットです。

さらには、全国の産地で天候不順などによる供給不足が発生した際には、取引先から安定供給先として期待されることも少なくありません。研修時代から全国各地の農家と交流を重ねて築いてきた人脈も、現在の販路拡大につながっています。

一方で、北海道から本州へ新鮮なレタスを届けるためには、物流体制の整備が欠かせません。レタスは鮮度が重要な作物であり、収穫から店頭に並ぶまでの時間や品質管理が商品の価値を左右します。そのため佐々木農園では、販路の確保と同様、物流体制の整備も経営上の重要な要素として位置付けています。

運送事業者とも良好な関係を構築しており、出荷が難しい品質のレタスが大量に発生した際には、運送事業者からの提案により、福祉施設に無償で寄付する取組も行いました。こうした取組も、日頃から築いてきた信頼関係があってこそ実現できたものです。

佐々木さんは「ただ作るだけではなく、いつ、どこに売って収益をあげるかまでを考えることが大切。」と話します。生産だけでなく販路の確保、物流の整備にも力を入れることが、佐々木農園ならではの強みとなっています。

そして”受け入れる”側へ





レタスの冷蔵施設

就農には農地や機械、資金など多くの課題が挙げられます。しかし、それらを乗り越えるためには、支えてくれる人の存在が欠かせません。これまでを振り返ると、渡辺さんをはじめ、地域の仲間や取引先、家族など、多くの人との出会いや支えが現在の経営につながっているといいます。

「技術や経営は、自分で責任を持って、実際にやってみなければわからないことが多いです。」

そう語る佐々木さん。若いうちだからこそ失敗を恐れず挑戦できることがあり、実際に経験を積み重ねる中で、自分なりの農業経営を築いていくことが大切だと感じているそうです。

現在は、経営規模の拡大に加え、人材の確保や働きやすい環境づくりにも力を注いでいます。かつて受け入れられる側であった佐々木さんは、今度は人を受け入れ育てる立場として、雇用の拡大や社宅の整備など、次の世代が安心して働き続けられる環境づくりに努めています。

多くの人との出会いや支えを力に変えながら、農業の道を切り拓いてきた佐々木さん。その取組は自身の経営発展にとどまらず、小清水町の農業の未来を担う新たなモデルとして、大きな可能性を示しています。